諸寄夫概抄

伊地知文庫
文庫20
306

文庫
306

詠ハ哥也哥ハ詠也轉ヨ通咏モ同永モ同字なり
尚書云哥永言ハ云詩ハ云志歌ハ永言哥ハ其義ヲ詠
ヒて以て其色ヲ長スルハ咏吟なり徐廣注云長ハ
引其聲以誦之哥ハ詠其義ハ長其色哥ハ咏義
理吟也哥ハ五音正也混沌未分より五音ハ合也
國常立尊出現給て人ノ五蔵六府宮商角徴
羽備て人ノ万物の長ヒて物をいひく万物を愛
ヒ知ヒ也哥ハ神ヒ通ヒ人の生ヒと同ヒ
出現ヒ給て人ノ世ヒ如く草木花實生也花ヨ礼
樂ヒ礼ヒ也君臣父子ヒ道ヒ定てより樂ヒ作
出也本央土金水開ヒ初て五音正也神代ヒ草木
良物ヒ云ハヒ人ヒ也本央土金水ハ陰陽ヒ理ヒ

造て五音を正しくするハ天地の氣を調てなる也
本大古金水礼樂出来して君臣父子の道を礼
して父を父子ハ子たる形也五音備てしう
善くなるを其一字を不思議に出現する也樂
と云物を形もてあらはしたる響ゆく也文選云
詩と謂ハ不かたて絲竹を音樂を備て天地和
順して五穀熟する時人のいを治て欲を導する也
五音ハ乱て淫を滅を見する也鬼神も
獲を道を感ぜ人を宮ますと云博陸の行跡
大天地を自由をなる也是五音ハ乱
天下ハ乱る者也其徳のうまてるの面をる
者なく道なる也是宮商角徵羽の声也

樂器学器也礼記樂を調ハ乱ハ此調して下徳也
百春樂を都卒内院の樂也地義を薩ハ夢
小乱て世を治行也法華経を作礼而去を畢
是也世一字を人ハ拝を樂也樂ハ徳文代集を
天地を調る人也哥ハ人の詳を哥といふ義也
哥小しすむ徳を天地を知時節を也

大風哥　漢高祖威勢事

大風起雲飛揚威加海内歸故郷何得猛士
守四方

尺名云人聲謂哥歌ハ柯也木ハ枝也哥ハ木の
枝也木を切て棒のとくして行を走を
革赤に柯葉ありてしろハつ也ハ木ハ法也草と

[illegible]
[illegible]代より詞[illegible]素戔嗚尊
[illegible]世一字ハ初也亨ハ天照大神よりはじまる
[illegible]神代より[illegible]
詠亨之大概
之の字不入ハ[illegible]ハ[illegible]の字入より大概文選ニハ
大略と注す天子のキホムラヤ大綱也大綱一筋にて
細ハ[illegible]也[illegible]心可[illegible]ハ[illegible]十乃物を
八九種と[illegible]注也[illegible]概史記ニヤクイン ハクイイ偽ニアリ

情以新為先

心意識の三乃[illegible]情の一字に合わ心ハ起現する
[illegible]意[illegible]

眼耳鼻舌身意小遠ク事を[illegible]
是識ハ妄ニ知[illegible]と識と[illegible]方より心意
念とあり念と云義面白也念を人の二心と書也
双方の弓に[illegible]ての心也青白を分別して[illegible]
青柳と知[illegible]と也楞厳経ニ心ハ人の形
意ハアヤツリ識ハカサリ[illegible]作出ス神也心ハ新意ハ夫
識ハ火と炎と知也[illegible]奇より人出[illegible]識譬ヘ
[illegible]より八情ハ増也情ハ七情アルニ依て情ニ喩也
喜怒哀楽愛悪欲 醫家説相替ル
此七情[illegible]ハ[illegible]出来る事悪雑心より悪す
[illegible]物同物[illegible]心胸乃悪
念散して清浄なる加よ神慮佛意小相

叶也毛詩情乃字を皆う書き毛的情内在心
為志顕言為詩情動中顕言不足言故嗟
歎不足嗟歎故詠哥不足詠之不知手舞足
蹈　古今序云感生於志詠顕於言是也
月夜に花に寄する朝夕の思ひ
世のうつりかはるにつけて人も
花に鶯鶴草に鹿のなきて
如物ようつりてうつりともいとはんも多のくり
情と詠物先と云ハ寄ハ是高減也
在りもわるくもの人を除てよ人を法通先人
詩の論と寄と先人の詩をふむものもまた
心をわるくしてすれハ又是風よりなる大事有

日と河を東ものいつるを西のと云ハ立
春ハ年毛乃年乃年を以ハいきてやに名をを
かへ事乃ものもしてを逢恋ハ難さうハ
是しうる恋ハ夫事をを逢ソテモナキ事をしてハ
詠みくハ物を是

求人未詠之　見宜求人未詠之

心詠之　心詠之　心心者務内
人未詠と云ハ見宜求人未詠之心詠之とハ点家
の用ハ人を見よ人のうを邪ハ詠之と
俗の世乃業ニ心ハ物を越しうなと
を為て或人ハ和ハ月の清きとよりハ誤也
雲ハ物を物是月乃ものを見ハ者乃物を

老人行てしたがてをいとうる也

詩評云百首必一首卷初必卷終百首を作ても

同前なれハ毎曲ごとく

梅聖愈云詩評云情新語工先人得所未通

能狀難寫景如在目前

詞以舊可用　ホ二

前の情ハ新と云ハ先達のよみ人を隆て新く

いまハ詠ずる境界に到てつとめるよみ人を

の詞ハ舊可用と云ハ新分ハ詞を奇巧を山乃

天ゆけて月ゆ也なしとのやうの詞古今集よりわ

ゆを平讀と也情ハ新と云ハ詞を除ハ二句を

美ハ新分ハ詞を取也ハ新詞ハ舊ハ古ゆ

除てとの事也

詞不可出三代集先達之所用　シトニト毎流用ク

新古今古人等同可用之

先達之所用とハ万葉ハ付て鳥居小路ハ新古今を

用ゆと云ハ語新古今の内ハ古人の等を平用とハ

と新古今一部可用之世中事誤也今ハ拾乃

集ハ万葉ハ古人のまゝハ可用也新古今ハ花ゆ

月ゆく雲ゆく所ハ道遠流ハ君ハ雁て云持ハ

進ゆ山ゆ流ゆ者ハ雪ハ而白如玉を

ゆ人ゆ也ハ新古今ハ拾乃ゆ也

集也ハ八ゆ拾可心先とあり又次可詞先と

あり詞肝要也安居清行和歌式云

先花後實古語并畢陋所之名異不詠
只花中求花玉中可採玉
後撰云桜度も花は吉野紅葉は龍田川大
更科云秋も殊に哥合の時も遠國の名所近き
所也詠蓮云物も如なるもの哥ぬ
庫云云云
風躰可效堪能先達云秀哥　弟三
風体を知すして風体はいかゝ
甲乙不可有之上行所下習之風躰と
謂は通世風俗の弟一也弟一すも可重也然時
和哥をいひ云て風体はいかゝ弟三に世風
大天地の氣也地水火風の時は五形共に風躰大凡の

氣也風也人の身なるは指合の詞姿也世風和哥姿也
人乃五音はあるを云て云言行の二つ風なりあとに
約束の事也是を拳は法と成詞ッ勵行とも
也以行速依難治身備五音云和のかきて
よりて風体見るべし其身を損を統なり
人間のまをよりて未来記は風体は子知宗尊
親王御哥は風體いかゝ乃より為世中絶は終は
趣論所詮也其時の御哥
虎なるこゝろなるべし荀子云今は鼠有あり世中
此心は礼記云用則成虎不用則成鼠
古今序よりは（乃）ろとりひめ流とかりろ乃
清なる人を注書は此は雅なるの流と云云

此ところわきまへれハ其はかなき名を云大体にハ何と云なし
哥も何篇とかくまうしなとよみてもなほ広事あるまし大
様々に口不定可詠千変万化にて
四弘誓願云法門無尽誓願知
いまはた風を嬉事第一也新古今残春の心を
後京極摂政
吉野山花乃ふる里跡絶てむなしき枝に春風ぞ吹
俊成ハ述懐百首に述懐の心なき俊頼恥運百首
かなといふにて
後普光園摂政の説にも風体ハ上古と一篇に同結
色は万葉を本とて大唐ハ移風易俗政行之様に
かゝる事也我国の風ハ上古に却りと愚問ゆへあり
日本ハ神代乃風不易にて

堪能　堪能とハ生付テ能テ生まれ器用者をいふ也
先達　先達とハ其道を師資相承の者をいふ也
秀哥　いつれもよれ秀逸の歌なり也此段聡に心得
堪能の器量の者も先達まてあるまし也堪能まて得
わきまへ生付に無器用者もあり又器用者て実
かなはれ者もあり堪能先達也てハ秀哥ハ無底に
到其内によれ歌と見てよむ也よき哥といふハ詠し
置し此秀歌とハ奥乃百三首是也
不論古今遠近見
宜哥可效其躰
三代集によみてある当代の風躰
なりともよろしき哥と見てよむ也奥ハ古今相交
狼籍無極歟といふ所に合て見てよむ也

近代之人而詠出之心詞　中ロ

情〻新為先と云事相いそんあに近代之人而
詠出之心詞陸一句謹可除弃と云事ハ縱ハ経
欲宣宣此義而説偈言と宣ひ給ふ事
別の事なり陸句除弃ハ新〻なる
近代の人論て讀ん事ハ不入物也

謹可除弃之

此篇肝要也近代の人の詠出多き陸句を除也自ら
よりも為ハ詠〻ふる通へハ避ふる通宜年〻来今
日元亀二年ニ至ル六百七十年ニ及也先人の詠出
之ふる作者ハ除ふれ事ふる世ふ大ふ不及也
歟ふ演の玉砂杜の集ふ文ふ思ふ

七八十年ハ来人所詠出之
詞暫く不可取用之

天治大治の比ふ不及其家也明ハ捨遺ふ
下ふ沿也平ふの分ハ不取ふ定家の五代肝
要集と云物あり三代集の上万葉下後拾遺
かふ也此代ハ如ふ作者ハ不及也詞華集
以前之事を以ふ定家卿ハ此代ふて詞新集ふ
七八十年ニなる也　宗祇抄ニ云
於古人奇若多〻其同詞詠之已為流例
如先陸句〻新為先と云ふ詞ハ四可用ふ
風雅可数堪能先達之秀哥ふ世ふ相
果て此三の外ハ五人ふ流例ハ可ふ

事也道路流言と左傳に有世說に雜言と
なれ共なりこれらは当たらぬ事

但乱古歌詠新奇事

古今を取ハ理運也但取様有五句の中及三句
ばかりを也二句之上三四字ハ過分也上句ハ大概
取也猶案之ときハ肝要の事也奇と雖可
吟事専一と云也技日休と云者三體の詩を作
様を云百錬の成句千錬而成章一句ハ七言也鍛
冶か金を焼て槌をあてゝ折ニ悪ハ散て善人金を用ニ
立ハ百錬メシキ句ハ出来と雖案之と云ハ案し
なるべきなれ共なるまじく迄事也雖
案之と二句之上三四字逸之と云ハ今一字と雖案

我れ知らぬ事也変と雖と可心得之古歌
取事ハ有ハ無隆限也只案出しら所を
なるべしくして案ら也當時の連歌の初ハ小
なく大不可然連歌を人よおさらるる者
の時殊更早向よりは日数ハ有ましき也又
一夜百首なりとも有ハ人乃誓言也
一首なりとも執しよく案の事也貫之ハ百
と十日ハ世日なりよりて初心乃時ハ案する
なるべし古今の本句ハ有ら時ハ有ら案
之也古歌ハ有捨也取ハ云俊頼云
奇ハ人乃新と新事に当ら乃ハ今也
事ハ頓成流の投作也換骨と云ハ仙人と成事也

古人の歌の作を取ハ仙人の成仙の事也縱ハ古今を
取ハ點化而加巧を詩評詩也換骨の法也奪胎手
聲一度飛を取て一葉飛横川必此取ハ本意也
云て落葉の詩ハ杜鵑を引替て風ヵ渺一葉ノサワ
トイヘリ寄特ちく只耳迫ちいやたにうゝ見とも也
詩三易と云事ハ作意三場事ノ心モテ上也見
易識易讀易此三也寄ハ口の中寄ちくのゝを
定機ちもよも也
秘説云口ノ定機心ノ定機人ノ定機此三也先此
三ハ一也数寄乃時ハ又何とも物ハ多ちを
五句之中及三句者頗る分
ちゝ如也我ゝ句ちゝ何のゝうとしてなるが

此等を取て定家卿
年中行事ハ句ちゝ作ハ仙ハ多ちを
是二句の上三字ハ過切ちゝ句ちゝ結ハ嘉
撰其下の第ゝ句別ちゝ若別の取ハ也下句ハ
ち今もゝ句ちゝ本句に本ちゝ本ちゝ
ちゝ句ちゝ也ハ定家卿の歌ちゝ也
ちゝ心寄ちゝ
宗祇親王
春日山花さかりなる作ハ定家の開ハ
ちゝ中院大納言為家卿毎句花麗也此度人
孫ちゝ本ちゝ長句云中歌ハ三句ちゝ
作ちゝ事ちゝ也花さかりなるを稀義

つゝ[illegible]は重而不遠必此句を構義は必何とも
為家卿の心は上句と三句とは得[illegible]ると也[illegible]心
一首の中に三句[illegible]を不富[illegible]
今あんと事や[illegible]月の[illegible]月に[illegible]
[illegible]を定家卿雖云事性[illegible]に今あんと[illegible]に
[illegible]月と[illegible]
中絶と取[illegible]上句下に重て重ねと[illegible]
[illegible]の[illegible]定家[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

世の[illegible]
[illegible]
定家[illegible]
[illegible]
きと也
久方[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊勢の山ハさしも岩ほよりなる雲かゝりて世の切字なし　定家
　而かうしろといふやうなる事也

以四季哥詠恋雑哥

定家卿さへ四季の事をのへて四季の事によまれ候へ
但恋ハ同し事の心肝要也守て不可也とよみなされ候
とすと云く

初心乃山かけくちかたに

枕詞をしるへし其人より哥の善悪にかゝるなり　宗祇かいへり
まつ題也玉粋乃道也人すくなし此方ハ二句三句取
なすと云事世にある例也委しくは書載すれは不可
限如此の類すくなし何時も不憚也云く此上まて三字
免之かくある人遣すへし云く

とてもかうらふ哥はきゝすまし侍り
年の内に春乃きつるハ去年拘りなれとも不可取云く
の稍乃哥ハ如何さなれぬ事也云く
月やあらぬ春やむかし
桜ちる木の下風
　此末ハ力を入る事なし無念云く
　桜ちるとある五文字に趣也
嫡之可斟酌事櫻ちるとふ五文字にいへる花
落哥にても末ハ何すとよまんとや定まる
生れと云類ある末句よえよしへかすと也如此
あらといふかく多く有へきまゝにかわ
不深くふかくはかりれうつ　子細ある歌をしれ也
　如此類とあるにいまをれぬ雅まよみ候也
常ニ観念古哥之景気可深心

[illegible]と云ふ事を覚と云ふ念はやはり心の事なり
向後指心を云ふ念は時を念人と云て向と合ふ事い
ての事なり人二心なく志二ツ一に成て自他一に成て念
となる心念佛と云ふも元生と仏と一に成を覚
念古歌亦云ふ古今の心と物と一体に成て心
なる事なり新後撰に念して自他
教得する心寛平法皇の御うたに
[illegible]心所に深く入て歌を学ぶ
[illegible]学力強く入て隆祐卿
心は成道の撰廣歌なれは言葉句の
すき作者成就してうきをたすけ
[illegible]

後普光園院漢歌は極て和歌の学は千載極て
詩評云天下書不可有不讀然而殊心不可有用事
云讀書不学其弊格少煙雲草樹山川鳥獣不
過而已胸中ハタヘリナケレハ同事ノ何度も取出ス
雅ト云同詞を折ふし云事を必用事ヲいとも短き事
ハ月ハ廣歌なれとも此作意肝心なり
殊可思習古今伊勢物語後撰拾遺
詩ト云字ニ余の物ハ
よ嘉伊勢物語と云ハ人多ハ不審とされハ伊勢
物語ハ古今ハ前の物古今ハ家上集して物八
下ノ月伝不審後撰拾遺下ニハ雅重如古今の
下ニ雅重ハ或統花実ハ集乃心と重と云統

されは古今ハ物のうへに置臣龍也古今ハ花実ハ代
萬なりけるとそ
三十六人
壬生忠岑ハ雖為随身依堪能殊上手之内被召
隆那和哥之先達
肝要之所也時節景氣ハ隆那和哥之先達雪
月花の上と思ひてみれハ時節景氣ハさなから花も
ちりて落葉となりて花ハ昔になるといふ事をつねに
可知事也春夏秋冬の事ハ皆不留一日廿
寅刻より至巳刻午刻迄ハ成劫未上刻より住
劫末終戌ノ壊劫亥刻也此義人間の始より在之人ハ廿四五
歳以上成劫廿以上住劫五十歳よりハ壊劫それハ一切轉変

なる事天地草木の上まてハ四季移事一日のうちに
ある様に心得て歌をよみてやとこゝろ事也今日の上
なる事は明日の上にてハいまた古今假名序に昨日ハ
けふとくらして付ておもひもかけぬ事をいひ
なすとのこゝろをもて縁思色とてもかへし
もあるへきなと心かけて一念の間にもよくよく
歌よみなといふ事に定まれ事なれと我よりまと
詠て心胸と顧よきよみとて
世間之盛衰為知物由白氏文集第一第二帖
道遠院ハ時節京氣世間之盛衰為知物由被点之
テ是ヨリ晩ソ發メ三晩ニ思分テ白氏文集の事ニいわ
只一句ニ被用ル為ノ字ノ被置タルニテ関元々々稱名院ハ

「見ント」世間感ト云テハ人ノ感ヲ為ニ知物由ノ白氏
文集ト句ノ切テ第一第二帙ト被見ル樂府ハ
ヲ文集ハ長慶年中ニ集テ則若長慶集七十卷
ヲ七卷ノ記ノ「裏ニメ書表裏ト云ナリ十帙ニ
第一第二帙ハ端十四卷第一第二帙ハ樂府ニ
梅花院說ノ如ク常可握翫深通和歌之心ヲ
心ヲ添テ被書ケリ和哥ニ徒通ヲ云事白樂ハ
唐太子賓客ニ非ル下義人ノ女人樊素小蛮ヲ持樂ヲ
詩ノ作テ老婆子ニ問セテ見ヲ耳ニ遮レトイヘハ直ニ彼
テ詩ハヤワラカナルトヲ云テ王照君上陽人陵園妾琵琶
引長恨哥ナト此ニテ作ル可ク別ル
唐世九代代宗時大曆十一年丙午生母梁氏四十九已西流

浔陽作琵琶行唐十二代武宗時會昌六年卒歳七十四
源氏物語ノモテアソブハ世間ノ感裏ノカケリ憂世常ノ作者ハ
悪ク物トテイヒ〻キ風ノハ嫌ヒ詩ハ悪トモ風サヘヨリハ安雅ヒ
和哥無師道只ハ舊歌者師
所詮和哥ハ師道自然ノ教得ヒ他藝及末世不然
多強ト哥トニ右如之云ヒ古今序云富隆餘於金錢
其骨未腐土中其名先滅世上ニ
梁ニ沁於古風
必新之時和哥師道ト云ニ相遠ヒ模ラ作ル古風
之趣ヲハ先生ニ問テハヒ
習詩於先達者誰人不詠之哉
教ハ元物ノナラヒ也習ハ礼記ニ雖則學習此習ノ心ハ惣ニ也

論語云學時習之亦同意羽月云是書の巻を懸て餝ル為歟其時歟書カ羽ノ月カウテ日ニ曝ナラスル也
平習と云は心也習ハ字ハ鳥を付て小雨毎度
不習ハ鳥翼之作ル云ハ学ハ子を付て小雨毎度
師説と云和学に学師説と云ハ小雨に脇篇と云ハ車
造也桓公カ窓ノ前ニテ車ノ造リヲ見ル桓公カ文を読
ムを車作リカ問云是ハ何事に作ル桓公曰是ハ
文と云古人作事ハ想車造カ云ハ論ル也
其間ハ知ルヘシ其人の心ハ知られ難し古人
糟粕也我車を作ル糟ハ乃成実ハ千年ヲ経ルト
雖モ其人の詞の粕也千年に成ルと云ふ
子は是の所文を其定ル作ル云ハ故文なし

同心ハ知ルヘシ其人の心ハ知られ難し人を
ゆるしるし欲ハ心ハ行ル所ハ作ル云て
其人の心に依リ乃席の事なれハ数得也

誰人不部之式

孟子曰舜何人也我何人也有為又如此
舜と云ハ何人也我ハ何人也と云ハ聖と不聖と也古今席人凡
既没不在和尋千載と云ハ尋ハ尋ル也
今世人凡賢之ハ世人ハ賢ハ世人也

秀哥之作大略

風体ハ哥の風ハ秀哥の風体ハ人ハ秀哥ハ
和ハ哥の和ハ和哥ハ人ハ

隨花時之覚悟

情意情ノ心一向世ニ許ス也時ハ混沌未分ノ時ノ時ト
云天地草昧ト云ハ草ノハジメト云也易ニアリ山統年寄ト云也
我身ノ早下ノ定家ノ詠歌八十九十ノ老ト云也

古今相交雅藉無極歌

後撰ノ歌ヲ被入ル事ニ依テ早下ノ詞也老時ト云早
下ノ詞ト可心得云

春ヲ待ツ山ノ雪ノ下ノ草ノ時ハ心ノ新ニ歌ヲ詠ン
第九ノ巻ノ事ニ上ノ定家ノ卿ノ拾遺集撰者源通
清十體ニ云ル中ニ上ノ定家ノ卿ノ和泉大将定國ノ
隨身ナルヲ撰集ニ入ル時ハ義春立ト云ル
ヲ加ヘ入ル歌ヲ詠ス事ハ云ニ新ニ古今
立春ノ歌ヲ以ル今日立春其證ヲ立テ吉野ハ

深山ノ雪ノ消ヲ見テ春ノ来ル事ヲ思ヒ代テ五日ノ風十日ノ
雨時ニ応ノ思ヒ仁王經説ニ心ヲ付ル事ヲ云ハ
立春ナレハ霞ノ立ル事ヲ思ヒ下ノ草ノ芽ノ出ル事ヲ思ヒ
なるの世ハ不秀ノ時ハ吉野山ハ春ノ雪ノ消ル
情ヲ詠ス立春ヲ詠ス也ト云ル也
てけさ分くるとふ心ヲ
南方ノ雪ノ消ル心
天ノ方ノ春ノ時ハ草ノ芽ノ出ル事ハ言ハ
定家卿ノ歌ニ仁和ノ歌ヲ詠ル事ハ
心解ノ歌ノ心ハ有心強ノ歌ノ心ハ葉平ノ歌ハ其心
わまりて云ル歌ノ事人々ノ歌ニ
芽ノ菜ヲ摘テ万人ノ下ニ給ハ深切ノ事也況平餘家

甚雪代打拂て橋行ふ実に王道也雪中に
野梅ほころびかゝるまちを見て情懸一段春意深心
の求まて五十六ふく不動の即位あり野梅の松より
差建を採意深雪に野梅と橋行ふ心なるべし

梅

梅樹なるまて雪のふるまへよ法雪ふる
此代の雪作ちと不知ふくうりふいうりふ雪也
谷より出ふく移高木陽雪ふ谷底よりて陽気
のわるふ雪也梅高木陽雪梅也梅得春陽て花ふ
出ふ雪降ふ梅ふ河ふ人乃ふうあやまりふ
ふ梅ふ雪ふ梅ふうふ雪ふ三月ふ乃ふ流れ見
又推量ふいいすてふ河雪也梅ふ捨ふは
今乃世ふ必行ふ

梅花ふ梅ふ見ふ雪のなふ見ふ
古今冬部拾遺春部ふ入角ふ定家ふ行ふ次
ふて雪ふ此雪ふ梅ふて八古今ふ捨て拾遺ふ付ふ
ふ梅ふ人丸家集ふ春ふ入ふ男ふ春ふ男ふ春ふ用也貫之ふ
意巧ふ立ふ花ふ入ふ梅ふ天雪也天乃雪
のふふふ見ふ梅ふ見ふ
皆霧也年乃雪ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ
ふ見ふ梅ふ見ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ
定ふて乃雪ふ雪ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ
ふ見ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ
ふ見ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ梅ふ雪ふ

人々はきまりもなく花をたづねもとめ歩行ひろ
古今の所のきをふんこと年毎年動揺まはる
ことふ屋をもりそなへをはりときて別の坊よりやるる時年
坊よりかくはりに屋をもりはあるはをはりてよりも
少わ花はいとしくたるの人のはいかをはるは然わるる
たるを也
はるの花はいとしくたるは是戒の山のひとみ白雲
山のはい花をはりはしく俠也只山のあるはい岑奕を
俠をは遠遊玄奇をを山のあるはいくよはを書に入れは
雲の前をさすわるはいかをはるとの
まてよりつる也此をもて花をもはるはるの
わをはるの外山の梯より頭より花をはるはるはるを

秋の往はよりもはるはるはるはきうはるはは六月花を
百姿の大文人はいはるはあるはや梅のはるはるはるはつ
清濁はをはるはを惣百はは清はるはは只はるはをはを濁はるはは
社人はいはきはるはは世はは清はるはは濁はるはは
百姿の大文人のまはるはいはるはうはこはるはは月はをきは金
百官の座也惣百官の年中陸はは二月より三月
五月は諸社祭はるはは三月陸はるはは花のさく陸
はは時はは人はるはきはは花開はれはは家はるはは金
跡はるはは乃はきは是古詩云太平有像村々酒寒食無
人所々花
はるを家は所はをはて花をはは天下泰平神也
山梯はをはは少はしはは久賢乃平はは人はは渋乃はは絲

花を澁り似せる事ハつねの事なれど其まゝ通
ゆるしてもよ葉ゆるしてもよ東乃雪線ハいとくるしく
思てそしハ澁のあるハ八つきの花ゆへ此間人と
をみつきをしハ叶澁も花と同事と面白ゆゑ
梅春院ハちゝ者ゆゑ澁をくるゝ花也
ゆゑんの人をよ葉ゆるすとも遠慮ハ近代尋ね
梅ハ花ハ俗りの句とそ
梅さく春ゆゑ乃ちゝ者ゆゑ日をかゝる多くれ
人花のあるゝ夜を日より加ゑ移んの方ハ花ハ
御製ハ自然乃出線と八人て時代不同の方合才一
蕾ハ枝数ゆゑ仮ハの齢を枝枯て自面ハ花也九十
賀ハ今一度ゆゑ仮ハ不可ゑ餘ゆゑ出下心面白ゆゑ

年ゑ人て花のはりゑ歳ゆゑ山乃人ゑふ事ゆゑ雲
さゝゑハ山乃ゆゑ山ゆゑ雲ゆゑ山ゆゑ雲
ゆゑて雲ハ花のさゝゑ山ハ雲ゆゑ乃ゆゑ山ハ花也ゆゑ
なゝゑ山ゆゑ雲ゆゑ山ハ雲ゆゑ山ハ花也ゆゑ
是ゆゑハ山ゆゑ山ハ花感乃ゆゑ
いさゝゑ春乃山ゆゑ雲ゆゑ山ゆゑ
ゆゑハなゝゑハ人ゑ花ゆゑ花ゆゑ
よゑゑて人ゑ此心ゑて家業ゑ
思ゑゑ春ゑ山ゑゑ乃ゆゑ花ゑ
櫻ゑ面ハゑゑ花ゑ
梅ゑハ花ゑ是ゑ流ゑ不人事ゑ宝ゑ
流ハ只梅ゑ是ゑ定ゑ家ゑ

東の異花小菊(サウク)と称する衣の心をさとりかねと云ふ流れ
をとゝ曲事也梯を弱てきてうたやうたれたるかゝ
さゝ小野篁両度の流を預よ幸の事なき人未だ下に
い称てなりさんて也花を宣旨取て
梯の露乃ちるを小々ちるを小々ふるを夜宿を奏の心也
花乃色ハ盛りよりなれ出ていろ〳〵に我身世をわたるなるかたに
古今よ市乃宮と云を待て何事なき人花ぶ乃人てゝの
心秋ぶとゝ行よ何事なきてゝ有し落ゝ人今年ハ
ちるを預よ来年ハ見人ハ又小町ハ官女(クワンニヨ)
事ハ花の比陽の入よ花乃時風雨ちけく風魔雨
難とゝ行て小町ハ人ハ清をハ知ぬまたちり
角ゝ花のゆんなるゝ人ゝ拙ぬ自面ハ世
なるゝを云人ハ速歌よ面ゝ世ゝ人ゝ有ゝ地ハ定
也於此ゝ面をもゝをてゝ小町心ハ年の首ハ眺り
ゝを也ゝ春よ秋よ事ハ此ゝよ文字ハ有耳よ不清上
ちるを乃面ハ思角ゝと云ゝ
又ゝ乃ゝ野のゝ花乃色ちるを春の内の
ゝゝ云ゝ文ゝ内ゝを云ゝ五文字ハ見ハ詞華
集(カシウ)
長能哥よ
歌(カウ)
ゝ歌乃ゝ内ゝ形ゝ
ゝゝ乃ゝ野乃ゝ形ゝ
内野ゝ乃ゝ
内野ゝ乃ゝ事ハ花のちるを
かけゝ花の雪ちる暮の神ハ

あるまじき行ひなりとも此時は花ちりそこなわぬ
良辰 美景 賞心 樂事とて四義也此花を四義を備
事は過花のちりて面白と良辰花を賞する賞心
樂事を忘る不絶して乃ち事也又た義を初去
大さむ[illegible]ふる時分を良辰也樹頭の花乃風ちりを
ちるを惜きゆるを賞心也惜りに来る賞心樂事は
ちらんく来る也
八景の中乃ひけら春の日に志川の流れ花ちるらん
志川の二義あり花をいつる旅人あるを
美風のちるを館を甚を春のはゆくを
のちなるを行事に花いろきて散るを志川
四人まとて花をみて花をみる時に行事に志川を

かくいつるを志川を見て人をみる時ゆくを
いつる時分に人乃ゆくを花を志川に流るを行ふ
ゆくを此義に連歌乃ゆくを志川に流れ
字を[illegible]敬を連歌乃ゆくを志川に流れ
ちるを人を[illegible]此心を乃て一向の心を
ふるのを志乃心を乃て一向の心を
大世乃ゆかを文字を四敬院と乃の心不変敬等
書之

あまをとゝ志賀乃花園婦ゆく新乃ゆくを乃高
志賀に住を[illegible]舊故を乃人の住慣なる
[illegible]花の此を[illegible]ふ人乃をみるを乃院を春
[illegible]を住を[illegible]

屋根の事ハ此也

春日ノ社の事に書つゝ曰あり乃ち立すてゝ妙なる山

此等ハ乃ち古いふるもの事なり新古今ハ嫌事なれ

部立て平絶之伊勢物語ハ嘉祐と云て

氣傷部ハ入あり此部の更衣と結んで入るなれ

部立ハ如何と云事ハ山のけいふんあり宮殿

天ハ乃ち山乃ちうちたてゝ有こゝ花を入きる

なる事ハ有され有て山ハ天照太神ハ有乃岩戸に

引おゝ是ハ対天児屋根命乃宣にして又二度此

世界を照し給ひ山ハ榊ハ乃の榊ハ深山なれ

多ハ乃ち榊をきりて燎を焼て弓六張を立て

八百万神集ハ出雲ハ対の事也天香久山ハ六天

ハ乃ち香の通ハ乃ち霊地也榊乃ハ有ハ榊ハ乃ち

ハ乃ち此所也天乃香来と也天香久山ハ此天香

来ハ濁天香久ハ清也表ハ乃ち表きたにきりは

勿論の事なれ共表ハ乃ち表きたにきりは

そなたに有ハ閑く和清と云て一ての

うゝと怪ハ乃ち表をあらんなる怪

乃ち怪をめきすて交のさてなる事表ハ

表と云所專ら立ハ乃ち表きたにきりは

定家

大井河乃ちハ井きれあきさへ表きふるとむすと

山ハ雲ハ乃ちて表ハ乃ち表くあるハ川たかくなる井を

表ハ表ハ表ハ乃ちと云ハ

卯の花をハ浪の志らゝにかけて卯の花さける玉川乃さと
卯花のさかり比ハ月なくても白妙の河乃井手をも堤みて（仁治 大輔）
玉川の里ハ摂州の名所也玉川と云里まてハ名に志らる
卯の花の多きによりて卯の花と思ひて此は卯花をもて
有名よりの事也

五月雨ハ世をくらみ燃うら志めり垣をなし味ましき浪き乾く人
別よ氣つゝ藻塩をかけてたく也五月雨の比ハ乾されぬ物
塩を焼くにハ天気のよき時の事也五月雨の頃ハ焼く頃よ
なきにあらねと多くて焼くを也浪上の海人とよめる也
上代よりさしき所といへり源氏よも須磨の年
よりかたへ有れと座りかたへてよめる也

道のへ乃志み乃かけるて柳のかけ志はしとてこそ立とまりつれ

西行も一所不住にて有りきけるか極暑の時よ清水
の本に立よりてハ葛柳乃陰にてある程よ面
白く暫時と思ひつれハ刻を移しきつゝ有る也さ
なのつる涼しさを有る夏衣日まゆふ雲此雨乃餘波よ
有るハ有難き涼しかりぬるはうらめしき也かくひとへ
此ゝ大哉と云也緑樹陰前逐晩涼此也風の本
陰に水色になりてハ納涼ハ夏なと終日極熱して
行る所よ西のかさしと除てやうて暮れハ自然と涼
志くなるを云也雨乃名残入日のかけハ其のつき涼
しき也　自然の納涼也此其のつきと云事且ハ夏なくて
行きて也ハ日やハかなぬ年月を重ぬるに
後成の哥也面白き也難をかしむ物ハ年と月ほと也

独り此山陰にやうにして秋風吹きそめて六月
九月の頃、不情云ふ廿日の分別也。百用ふるわ
百民ごとに涼しき秋待ていとふ思ひたてまつる
月ハ情なきものなれ共うらふすつ多
古文真寶詩苦熱思西風と云心也

定家卿歌

おほつかなしら雲ハいとふ夏の空さへ情き夏草の花
夏の花うらん頃ハ極暑ゆゑ思ふ心ハ
山ハ秋の涼しき心也
秋立ちていとも涼しき朝の風ハ秋涼を

わさ田ハ実ると云事ハ用也わさわけとハ嫌也朝食
夕食ハ食物を用ふる事也御食ハ国と
なる朝食と食と意又付よりハ
わさ田の焼といふ朝食ハ
御食国を
續古今集よ
なつかしの朝ぎりの
ふるゆゑよりうらふるて
言ふ也
わさ田ハ稲を
ふるゆゑ
わさわけとハ
秋立て
独り
天のかぐ山
嫌也
稲を
実ぬ

秋深の年ゝなれば梅の花に云ひさふらひなる
秋はきは年ゝなりなれば萩吹風のもとすゝん
萩ゝ花の秋の年ゝを告侍ると年ゝ秋ゝなれ
ゝなれば萩の葉の高ゝ枝ゝ萩の鶯ゝ
ゝ秋の年ゝなれば年ゝ秋ゝなれば年ゝ
実落ゝ秋ゝ秋ゝ実落ゝ秋ゝ
わるしふ草葉の露の秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ不知寄也これは古文の詠と見てよろし
只文城野ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
ゝゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
月ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ

梅の花に秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ
秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ秋ゝ

月は陰性の氣に依て陽に對するが故に陽に對する
ものは月に對する性質を有する故に月は秋に
なれども月は秋に屬する故に生もの秋に敬氣
とて　こころ　心傷しむる性質　朗詠
大底　やはり　時　心惚　苦　就中腸斷是秋天
月は陰の氣にて月のうしはいの義を借て一般の樣
思へども　云　地面　とつく月
思へども　雲　なれ　を
なるべき　一天下に月を
恋の中の小萩　庭の月　うつる
中の小萩とは孤燈　春燒　ものう
中の月とは思を不用　とのまに
ひさぎ　ものう　雁　池樣　ものう
月の燒て小萩を　思　なるふ　ものう
趣向　とは　上に　同　世間
秋　ものう　小萩の　なる　ものう
秋　度の月　うつる　月　小萩に
秋　度の月　うつる　月　小萩に
感情　月　月　月
沒て　夜　ふ　ものう　山　ものう
ものう　ものう　川　ふる
あすの　野　玉川　秋　度　波　月　ものう
千載集後鳥羽院御歌　後徳　水上　月
野路の玉川　近江　玉の名　月　神代
ものう　秋　度　月　玉川表

三条西門とて名ばかりを小さき門を入る
月さへ物うきに萩を映してみるかなる萩
ぬれ人きに月を入るさ庭よ萩をあくるれ
みくあるを一枝もハ曲又もなんて也
なるぬつ思ふて式部久保の月乃うやこれのこの宣
家隆ぬ也何ともハ清宣と曲義と思月宣あと
下界の秋也三百月ゆり十五夜の陰を以て
思邪乃まとんるを也年の秋にもゆ時ハ月ゆるを
立時朝市ゆとて5ぬハ月ゆくしくゆる暁天よ
れハさけ也宣を也ハ月をにくゆ又ハ
十方ゆり為ゆ一枝ゆて氣ゆるなら
也天ゆ人滿鉄ゆゆりて月乃光を

物ゆ部くなるとゆ思ひゆる氣三代集の外
見習ゆ物ゆる後撰宣家の方を誰人ゆ枝
刺ゆ人きゆ可ゆ刺ゆ

秋乃落や秋ゆ行ゆ法ゆ乃ゆ氣ゆ寺屋ゆ月氣
枝島雅院御寺一枝面白ゆ思ゆ幸ゆ物を一枝
思ゆ百也百人一首に人ゆ人ゆ人ゆ人ゆ
在ゆ方ゆ人ゆ相思ゆ月ゆハの出ゆなるの出心ゆ所政
道を一枝ゆ思ゆ百人ゆ月ゆの沖ゆやゆハゆて八ゆ明ゆ
月ゆ屋ゆ名ゆ乃ゆ御製作也
ゆ月ゆ宣ゆ酒乃酒ゆ物ゆ屋ゆの萩乃ゆ人ゆ
一枝を引ゆ人ゆて入ゆ也ゆ宣ゆ出ゆて酒ゆ
まゆの出ゆ六月ゆ月ゆ人ゆ法ゆを乃ゆて也ゆ八ゆ高ゆ出ゆ

その世を遁逃の心ちしてまくらゆえてしかれ
それハ浅しけ人の雪は花と見ゆるしの方にくへるも
きとさ桜の雪と花をうゆつぬく秋の瀬ハさまよふと
秋の洞は秋露より雁と思る人の見地谷なとハ
見るへとしさと

萩か花ちるらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさ夜はふくとも
小野ハ名所にあらすちるらんと云雅言也これを露霜と
云説あり不用只露と霜とニ字也まては深更ニ至
露也又霜ハ深山になるてハなき秋也夜中なりともと
云此露にちるらむ萩に今一度見ておきたき也これ
ちうハ人の心かうけもたくし萩にゆかむとや秋の方ハ
おかしき也此哥七ツ字面ハ秋なれは秋乃部に入る也

定家卿の説結句ハ露也情ハ霜也名别さて　万十一
ゆきてもぬれてゆく心思ひわさ露霜にぬれてかへ
面ハ萩ちる下ハ恋言也あまひありけさなも萩れしとてハ
人乃心かうけるなむ萩にゆかむとゆ也

秋の田乃かりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつつ
祇注ハ常縁に古今傳受ありしのちおほよそ書きをとらせ
祇のそりのまゝ志るしたる抄也祇ま乃きふゆらまで加様
わかふ依て東ハ断絶さて宗祇注ハ天智天皇
道御述懐乃趣也非説也異国へ為御合力筑紫ヘ出行
幸ありて異国まて聖徳のまりますせハ日本大不及中事
なれハ王道乃衰ろへすると八兆能さて國母の諒闇とハ
天智天皇になはしまりますに也倚廬にゆしまし枕塊臥

苔園庵とは秋の田もかりあらしの後は苔は砂塵
は枕をあらはす袖はかりそめの庵なれば海そそ風を
あをみ波をかけて漁をなすとは海士の秋胸
中の餘思あるべし雅はつくばの昔のあとをしたへ
ばとかやつくづく秋の田と倚廬とは付て其まゝ改造を外
國に及ぶ雅は此度の心の中は辛苦の出板あり四を
桂川の月に桂とは辛苦をて思ふ年中の事をとゝ
とは素淡戸録の後は百姓のなを心百姓のなを辛苦を我
家をとゝ面裏傷ものは改造
たゝかの風の吹くく秋の野はつるはきとあはもちもきな
板橋文屋朝康京氣然は高はもはなるふもも
葉末のうるはなる

龍田姫かたしの玉の緒とゝとゝ龍とは乃男たゝ
たゝ姫清濁あるは清濁同音
高の玉りくとゝ秋の神うゝ玉乃龍
称とは造化神天とゝ唐乃詩
華くこれ雅うゝ思へは龍田姫の
ゆゝとゝ

たゝ玉を姫とは龍とゝ
門田とは鹿乃称りあはて雅は雲井とゝ
雅とは門田の鹿乃ゝさの雲殿とは居時
雲殿とは居時後とゝ
龍とは門田とゝ

穐風よさうたれしたるかけるは物ごと人乃聲とさとりなん
後撰讀人不知也夏山よ鳴時鳥やおもへば物思ふ我なり
おもふこともうれいやそらよむて自面よ御すべ言葉の
有へきはまりよかの為は末なるふかきとつまはなき
様よ為のおもひをこれにたへをみとも
もてなしうれしきの声に覚えて物おもふ袖の露のかゝるかな
擣衣の題也式子内親王哥也八月九月正長夜千聲
万聲無止時の心也わろき月のさえたるにむかうに
人も知ましこと也此擣衣よきころのさえて月のさ夜
なかき様もうちみて衣也宮娥夢破梧陰月牽者
不知聞者情千井轆轤と云題よて天隠詩にて
今宵も不寐入と云女の鐃軒の声を聞て我夢のはかなき

夜寒をおもひもかへりてよめると思也鐃軒ハ糸ぐ
物よ異ハさてよ物ての心也
はるかなる物あらしまても物ハ秋の様たへの心なり
大貮三位哥也秋来只為人長（しとにはなりぬ）也擣衣
聲を案ずる様よ唐土の声と思ふあさとも風玄
似のこもおりまてもうれいて暮ちにはかれ月の比ハ
背月乃面白きよ物あ物ハ寝ましと也又あまつ縫
衣して待まて砧きをその晩ハ様たへにまてる鐘の音は
唐人のやと同
枕上片時春夢裏行盡江南數千里
うとゆ様なる中に江南まてみえなるなりおもろきし
さてかはりふすよ　桐壺まわ

ゆえれハ門田の稲葉吉作て秋の花屋に秋の落るを
金葉集經信卿田家秋風と云題也花屋ハ荒れて
其後菅丞相を花屋と歌所見ハ此門田の稲葉我ら
くに吹と見てハ初句をなく花屋へ吹と也此流也
ゆえれハ歌鴻雁来ハ春帰を云也雁ハ秋を
来ると云去来ハ通也ゆえれも多くなると云事
なり門田也ゆえ拾ハ門田のとゆふる此葦花屋也
来ぬやうなれば人を思ふ此ゆえれ雁ハ
ひとしく秋風なりと也
宗蓮寺ハ新古今ハ同秋ハ格を二入事一詠也撰者
誤也諸本ハ色ハ有也松ハ風の喧物也撰原風也

まつ風ハ所さしき也推葉ハ風を引也色に
見ぬ者ハ秋ハ木ハ秋の涼山ハ物ハ涼也
秋の夕と云所ハ
ゆふ風ハ秋ハ吹なり秋を三のを
式子内親王歌二秋を真木の葉也ゆふ
ゆふ風と云ハ秋也ハ昔
なり拾遺年よりとゆふ風ハ思ふ
詠と人ハ秋を今ハ
と見てハ奇なりと也
ゆふ秋ハ
吹ハ其南ハ秋風ハ

なる也山風と云事ハ都むへ切て山風とよむ
つ山田ハ風のあらき抱をいふ事也荒を山風とくた
きて云ふ故也扨京極殿御會に羇中嵐と
云題とて秋と旅の此心にて詠れし故雑によみ
れ恥とうきしとて雑にいりたてたる歌之秋と
なりて秋とすへきといふんとて仍貫之家
集ニ野分の歌の中にいれ

さをしか素とふ山乃哭ハあらき田かりし霜たれく
人丸歌此哭まて鹿のよふハ田の仮いへまて入ハ鹿の
詳をきくむに霜ハ草ても雨かりしきと也

奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時そ秋ハかなしき
猿丸大夫 紅葉ハ奥山も端山花ハ深山

也奥山にて深き也聲きく時その時の字に心を付
よむ也 宗長爲證句

ちる紅葉か山ハ雪の下葉の紅に染しむ也

秋風のふきよするに志ら菊ハ花かあらぬか浪のよするか
菅家亭也此心の字をつけてよめる也寛平菊合の
時洲濱を作てよめる也花かとみむとまれハ浪よする
秋風のふくにみちておれハ花也と

心あてにおらはやおらむ初霜のおきまとはせる白菊の花
躬恒 これハ菊おほく霜もみんほとなれハとするよ
おもふハおもしろきもん霜にみさへかね也

白露も時雨もいたくもる山ハ下葉のこらす色付にけれ
紀貫之 もるといふ山の名にてよむ也もるといふハ漏也下葉ハ

強き地なれども下流まで行くなり

龍田川紅葉くくれなゐに神奈備の山の時雨ふるなり

きたるに二義あり此紅葉ちりて水に流れ

ながれゆく龍田川へ入みちの流きたるとも紅葉

ながれてきたるとも水の山の時雨ふるなり

ふるさとにつをけるとも時雨ふるなり

叶ふ

秋たつ来ぬ紅葉に有るまでかりきる通ふ人なし

始めきぬ秋を来ぬ一段面白き紅葉の情あり

時に人新たまたさを此紅葉のちるを、ふるしも

見まきを　秋たきぬ鴻雁来　左歴玄来八通也

歴秋玄を三通

千早振神代も聞かず龍田川からくれなゐに水くくるとは

神通自在の神代もきかぬ昔の今もきこゆ

山河の風のかけはしたちくくるは流も切れぬ紅葉なりけり

春通引樹高き万葉は山ぶと切てよむまくもてハ

山川をつくせるもの風の縁ちるを、ふるを縁す

石を入て水流防木の端ちるを水ちるを

なを残んに其上にかゝるは風のわたる

家隆卿

山のは風のきくるを

紅葉の寄るは紅葉の家隆卿

玉葉の中とは不傳也　後成　定家　光俊　三代の心よ

不叶之　年々に我ゝ人のかゝるは紅葉

をとゝの中那と定家の方也　玉葉に入ては紅葉

のきまくらハ神妙也哥ニ文あり一晩也と
保清くくもりなき月影に紅葉ちりかゝる山おろしの風の勢
信明哥也新古今ニ入ども秋ハ直也新古今集ハ新立
可起也此歌ハ屏風の絵ニ合てよめる冬の哥也連
歌ニハ且の字を入て秋になす也新ハ冬也無用事也し
さも耳ニ不立也かのくもらぬ明石の歌によんて高
あり五文字ニ不添之腰の五句にもむつかしく落ちる
雅の月秋のつくりかなと也面白景気也はつくと
大術術也人見の弁ハ別事也術術たるゆへ
以事也

春みちのあらしの稲くさのかんのまよひく時雨の山の神松
後鳥羽院御哥也布留の神松をよみ給へる也

松ハ常住不変なるを時雨のうつろはむとするをかくれたる也
争不勝と云也万葉に
時雨の雨まなくしふれまきの葉もあらそひかねて色付にけり
あらそふて不勝と云ハ時雨ハ色を付る所を神松ハ勝也
とまる也いかなるもみぢはこれ程にまつる時雨にはと
神松も色付んと也

秋篠や外山の里や時雨らん伊駒の嶽に雲のかゝれる
哥は涼を清いでこれハ神さぶる伊駒の嶽に雲かゝりて外山
これによみたる也伊駒の嶽にかゝる雲を見て秋篠の里ハ
時雨もするらんと云也西行作者の神也

冬かれの森の朽葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ
清輔哥也新古今ニ入る哥也東坡赤壁賦ニ

如こそ云ふ是
人新古地作思明月此人此赤壁に在りて本題是
月なりと云ふ事は此毒を可しと月なりと云ふ
なりと是思明月相當是扨とは心中入ると是此毒の
枝葉所思
表こそ云ふなれや寂なん隆と云ふ此は表裏
作古月如表こそ云ふ神へ云ふ小栄ゆいよ
表にもくもの云ふ云ふ此の栄はよくと
なくなりの所云ふ細なる事云ふ所は有る
なりきやに書て云ふ所を待つきられて
云を南極は宗を用ると表こそ云ふ所にやるく
の不遠きてしいうけ表裏と云ふ人の

表こそ南表を捨ててけゆと思ふ
て有て何ときて入らつとを
表てなる神の物もむすびて物表裏みを
枝表の所表物思いのある上は前よりまた
思ふより神は表と入らとも思へやてもなりし
何事なし思ふ物ゆと表ゆなりと思ては
月見ると所ふ事ふなりと
風の小流茅屋つあらむ業法事表裏なるら
人凡意きたりて意ふ表はきれと越が表
郭まりなりたる業表雷風の所は全ともて深
ら山中しなる意ふ人ふはしらしなる外なる
まはきみなりの人はまるの

感し吉野く山しらるれハあとなきみ雪ふる日ハなし
斯感をよみける心ハ清見原天皇出座に付て大和
の七八年出座ありける頃に吉野ハ雪ふかき所なれハ
吉野山出御れハ世おのつからを詠みける是頭にて後撰集に定家
今是ありとなる雪ハあはき遊山の逃き由へ引
今まてハつきんなる秋の落葉にて家々小松原し雪
家隆の第よハ落葉と雪ふりきてるを見ん古今流ハ
下りとやりいる雪ふるとりいるると詠のたとへ後よ致き
此續て山雪り是身しまたはろ身ぬるかし也
櫻巻に松竹のきちのわりしを経てそわりけれし
の結用のわる頃よ本かてよる是今よりハ續てと
天田くまなるそ

朝ぼらけ有明の月とみるまてに吉野の里にふれる白雪
是ハ四季を云所にて落雪也有明の月を山まハふみし
おきて地よ気のぬるハきてるを見るも音本来よ
月ハ光れ光ハおさまれしる頃ふり気に中く打ふりて
と云所也朝起て見る時雪と見ゆる光をおもふまてに
とる道遥に出てそれおもひやりる袖よふりぬ雪かハ
ある月の光と見てやまさまし とそ
磯上布留野の小篠霜をへて一夜ハかりにのこる年かな
序云也布留野といふ人とて磯上布留より出る也布留ハよ
の間ちりきや一年中と思へハあとしるると是霜のふりき所の
篠ハつまりえへのよき是大略の本意と後京極殿の御作と云也
君の代をつらきとうちて神風や御裳すそ河のそまむかきりハ

経信卿の父太神宮五十鈴川の河上より発れり
元亨仁天皇御宇に鎮座ありて天の石窟を
造漢高祖治天下相去太山確黄河帶如
帯と士卒を封ずるの約束太山の確砥と成大河の
帯となるとも君臣の合體の道を尽
末の為に乃ち世代を重ねて
衰傷遍照寺家集云世乃てるれ事を云ふ此
思ふべし夫人生れ
ぬ事あり陽下よりのぼり陽上より
高陽中隔其のかりくみて高のやうにきゆる
中の事と云ふ事あり
乃ち生の事に
逝迷ふ清事は

同じ人生七十古来稀也と老若共に生死
不相定生死無常を忘れ
秘蔵寶鑰云
夫生非吾好死亦人悪然猶生之生之輪轉六趣死
去死去沈淪三途生我父母不知生之中来受我
身亦不悟死之所去顧過去冥々不見其前陰未
来漠々不尋其尾三尺載頂暗同狗服之未の為
乃ち滴ぬ人と
みな人花の志は欲はなる若乃歌よかしれ
遍照の作也仁明天皇御歌
鶯と入て出家
除服して名花麗なる

[illegible]
[illegible]
和泉式部の[illegible]
思て袴の腰より[illegible]
[illegible]
かきたるとわしをそなふぬきすてゝ春花はて[illegible]
素服ハ[illegible]
除服[illegible]一忌ハ三年なれハ三ヶ年ゝ[illegible]三年不
学と論ぜり子貢之論成て一年より[illegible]重服奪
情宣旨をなされ[illegible]
服[illegible]奪[illegible]
[illegible]

[illegible]
いそつ[illegible]
たゝ[illegible]
なり[illegible]
なき人の形見の[illegible]
雨中無常と[illegible]
[illegible]
胡[illegible]
慈[illegible]
立ワ[illegible]
行平[illegible]
[illegible]

所の後も我と行人なきを可しまい人あらば内心
是有まいきに治定すべき事
去る天保の八年ふかさ所をとらせて見る人よんなかりし
世界を是八年と八年八年の数の極て八々六十四卦六
極て八々六十四卦負数六々廿六億千万里を隔て
心ゝすると是恐八千里也ともいかに貴之奥州の何よ
下ゝ者人よ送り我と所ゝ
見ゝたに人あらば次に此の間よ藻ゝ所ゝ
行平是事に成りてとなわりて是八避難を事
大問の事也東ゝ成れいむ何の事に成と八重と
見ゝふと万乗に有ゝ事也ゝ
おゝたいぬまも取わ人れを問ゝ任無の数に赤のまゝ

朱雀院なるゝ所行幸供奉して管原相国
やゝの帝帝と下ゝ
難波へ有大ゝ
ゝ所ゝ此ゝ
ゝ所ゝ
ゝとゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

雅俗の藻ようつりて聖人を感ぜ
聞ぬ百首の和歌は未だ有ざるなり
序文を藻ようつりては感ずるに序文は
今人のみより雅出来る人々の心を耳に立る
こゝに古歌藻に就て聖人を感ぜ
やうしてゝ不叶ゆえ聖人は一々人々古今新
立を尊ぶ宣長ゝ古今をかすけ出ゝ思ふ
かすけよりあり業のくつ内自来て下に流るゝ
わが道ありとの業は初意より歌を詠ずゝ
思心人しらやすりすれとも業ちはのゝ向ふ
業ゝ雅なるは世上人とも思ゝ歌立を
業ゝ雅ゝ内自ゝ思ゝ雅ゝ内自ゝ

内自内自よりするくとゝいふけるまの業自
とよりゝ出ゝ雅なきとも
東海の依野の新撰の業ゝ忠深を知人のなき
序文を思ゝ内自とゝふとゝん撰ゝ月撰ゝ内自
所人ゝ古今撰の内代と撰の内ゝ新ゝ依野の
新撰ゝ業ゝ思ゝ通なき前よりは求る我
思ゝ内自ゝ内自ゝ内自ゝ内自ゝ内自ゝ
ゝ業ゝ人名と撰ゝ
海業ゝ人ゝ新ゝ人の原ゝ業ゝ業ゝ人の業ゝ
撰撰序文ゝ丑ゝ人の業ゝ人ゝ業ゝ
わさちゝ不海業自ゝ業ゝ人ゝ業ゝ
なゆ自ゝ人ゝ新ゝ海業ゝ業ゝ撰ゝ

うと宮ハらとけるよ術第の深ゆへ也悪新の方を取ん
是如典悪ハこれあさらの事まてやすくよう心
餘聞きわるき勤してハあさちふとよしやき
いかにせん家の制さに君すれ悪の炷とうてゆるん
後悔で差是下野ハ各悪也何ハ三して炷の香にし
なてりしきハにこそわハ此陶の炷ちてへんう
室の制さにかりハにとや
又香れやのてふ手抑うせ子あすり宛行る人を害して
そそれハ又日十歸のかりと思これハ蛛をも絶もかかり
取残是只又日の手み録せ又日よ題く陽たうすく
打う種よ何とそふく地のうすへ天はえ高を思
ゆへよ雲のくそれ乃ア南ゆよ心つこりも古今此方は

けやよまて又四字うれんも重さうらハ古今也伊勢
物語よそハ古今の方もんハうちろも作その所ねよ将
香えり思也人の凡ね所すれとや
年々をさう人に竹斎の御南ハ又あもて其世ハ咲ちて思し　伊勢
けんハ深切の思也今まて思積ありとかうへよもとこそ
村とぬきるもてよとやとさく元来の多人と新しく
そをハうさ華ハ昔の月見高く公乃思てよとや喜
より始末也思乃不叶廣也紙も古き古人の集は
五返見てや高紙ハ只二返也寂初のふかき紙の百人
一首と後来る哉よ表遍あり此世よ物後の方もね表遍
あり東の方係ハ心地よろて子孫断絶よ
うるかるハ人を初流の山ありつらん天子よ付よぬ物を　後札

くちくちにつけてもいまだ不留意とよむべき事ども千載に未聞
不留意世事はつまるところ悪と新古今の言葉にもあり
石山の源氏物語の作りもの或は貴布禰の新歌も
稲荷の新歌の類は鑑賞と記すべき俊成の考えは
空不定なるものなりと世の考えは遠ざかる俊成集敬愛集
敬愛集なる人のこころやさしきものと新古今
意の類は合歌一八万人の
洲とはいえども実にあるべき洲川のほとりに未あるべきと思
宗徳院世界伊勢物語の作りもの
小のものなりとしるしとうの思ひ
てやまぬ心ばえなるべしと云ふ
つくづくと考へわたくしの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

為取河漢之説本朝[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ようやまいりかの物[illegible]
いんなれい物ドもたるを今ハうれもれを元禄
類を高松のことをやまいの事ハ山ことを
惜を マサニアハントホウるや史リテミヨムツ人今人ハ家にを
不ハを又ハ[illegible]心モアリこれハ惜を
永悪ハ度村義ハうれく人ハ[illegible]ハ秋の火者を義
東常保ハ和義の三の事理を これハ[illegible]
ハり悪初てやれ秋ハ成て惜の國ハ奉寺ハ我思
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]流ハ
切紙を
被為ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
板馬服流ハ切紙被為を悪義を[illegible]ハ[illegible]

[illegible]被為を惜ハ[illegible]ハ[illegible]
ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
変化ハ[illegible]ハ我ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

今宵我聟とうとを
慕ひて夏衣八拍を忘れかたうする神慮
月の雫ちりもてゆくいつまい独ふる思
封月明莫思往事君損顔色君減年